JALが取り組む新しい空への挑戦を皆さまにお伝えします

Embrace new Challenges JAL

REPORT

安全のリーディングカンパニーを目指して

空港での地震・津波防災演習

空港×防災

高知空港（右写真）では南海トラフ巨大地震を、釧路（右下2点）では千島海溝沿いの地震を想定。成田（左下2点）では首都直下地震を想定し、全空港的な演習を行った。

「その時」命を守るために

阪神・淡路大震災から今年で30年。4つのプレート（岩盤）上に位置する地震大国・日本では、今日もどこかで大小の地震が起こっています。

14年前の東日本大震災時には、陸路・海路が寸断される中、空港が救急救命活動や物資輸送の拠点となりました。津波で一時冠水した仙台空港も、震災翌日には約1500名の避難場所となり、5日後には救難機の運用を開始。ひと月後には旅客便の運航を一部再開し、復興の光となりました。

防災拠点となる空港の防災力を高めるため、JALグループは2022年から、被害想定が大きい空港での「地震・津波防災演習」を実施しています。協力してくださるのは慶應義塾大学の大木聖子先生。地震防災研究の第一人者です。

JALは2018年に慶應義塾大学と連携協力協定を結び、2020年からは大木先生と防災に関する共同研究を始めました。JAL航空みらいラボで産学共創を目指す粟賀仁也は、こう話します。

「大木ゼミとの防災演習は、いわゆる避難訓練とは全く異なります。可能な限りリアルに〝その時〟を想定し、さまざまな不安要素を組み込んで演習を行います。疾病者や負傷者、高齢者、訪日観光客といった配役に加え、津波がどこまで達する、設備のどこが損壊するといったシナリオをゼミ生の皆さんが準備してくださり、空港スタッフはその筋書きを知らされず、臨機応変に〝命を守る〟行動を探る。非常に実践的な訓練です」

演習は「2回セットが基本」なのもこの防災演習の特徴。1回目の演習で課題を洗い出し、改善策を検討して、2回目で検証を行います。

「9月には釧路空港で、12月には成田空港で2回目の演習を予定しています」と語るのは、JAL航空みらいラボの佐藤楓。「釧路空港の1回目演習は厳冬期の巨大地震を想定して行いました。成田では昨年、JALグループの枠を越えて、成田国際空港（NAA）さまやテナント各社さまとも連携した空港全体としての演習を行えたのも大きな収穫でした」

「この取り組みを基に、全国の空港に展開する簡潔で実践的な行動指針（アクションカード）の作成を目指しています。空港ごとに異なる課題はありますが、大木先生の学術的な知見とJALが積み上げてきた安全文化、そしてこれまでの演習の映像等を組み合わせれば、日本の空港、ひいては日本全体の防災力強化にもつながるはずです」（佐藤）

JALグループはこれからも、培ってきた安全文化を基に、識者の方々と手を携えながら、共に安全品質の向上を目指してまいります。Ⓢ

COLUMN

命を守るための協力を

慶應義塾大学
環境情報学部 准教授

大木聖子

おおき さとこ／専門は地震学・災害情報・防災教育。高校1年生で経験した阪神・淡路大震災を機に地震学を志す。北海道大学地球惑星科学科卒業、東京大学大学院で博士号取得、カリフォルニア大学サンディエゴ校で研究後、現職。著書に『超巨大地震に迫る』など。

空港で被災したら、どうしますか？ きっとご搭乗予定のエアラインスタッフを、まず頼るのではないでしょうか。そんな想定から、JALグループと「空港防災」の研究を始めました。きっかけはJALグループの「機内防災」スキルです。初対面のスタッフ同士が「ノンテクニカルスキル」を駆使し、チームとして機能する。これは他の防災場面でも大きな力になります。

空港防災演習でも「大地震はいつ起こる？」ではなく、「明日にも起こる」前提で、皆さまが安全意識高く向き合っているのを、ひしひしと感じます。

そんな空港スタッフの方々を見ていて、地震学者として、あるいは一人の母として、こう思わずにいられません。発災時は空港スタッフもまた被災者であり、無事を願う家族がいます。もし空港で被災することがあったら、みんなが命を守り抜けるよう、協力して災害を乗り越えたいものです。

拝見！ 大木先生の防災ポーチ

●モバイルバッテリー ●LEDライト ●ホイッスル ●常備薬 ●アルミ保温シート ●日持ちする食べ物 ●歯磨きシート ●メイク落とし ●化粧水等の試供品 ●ビニール袋とゴム手袋（圧迫止血用） ●携帯トイレ など

人によって必要な物は異なります。ご自身の特性にあわせて備えましょう。

Q. 地震クイズ

日本ではひと月に何回有感地震*が起きている？

*震度1以上の体感できる地震

地震クイズのこたえ

およそ200回！* 無感地震を入れるとその100倍近く！

*気象庁発表の震度1以上観測回数、2020年から5年間の平均で算出。

高知空港での防災演習の様子はこちら ▶

大木先生（左から4人目）とJAL航空みらいラボの粟賀（同5人目）、佐藤（同6人目）。大木ゼミの皆さんと。

慌てないで！

もしも空港で被災したら？

1 頭を守ろう！

まずは命を守るため、急所の中でも守りにくい「後頭部」を最優先で守ろう。潜れそうな机やカウンターが近くになければ、手持ちのカバンやPCでもOK。その時の最善で後頭部をガードしよう。

2 地震の大きさを時間で測る

大きな地震は、揺れ幅が大きいだけでなく、揺れが「長く」続くことも特徴。立っていられないような揺れが10秒以上続いたら、マグニチュード7以上の直下型地震。1分以上続く場合はマグニチュード8以上で、津波の恐れもある。揺れを感じて頭を守ったら、落ち着いて揺れの秒数を数え、その後の行動を考えよう。

3 空港から飛び出さない

日本の空港は防災拠点として、地震に強い構造で建てられている。地震があっても慌てて外に飛び出さず、建物内でスタッフの指示を聞こう。ただし、床・天井・柱以外の非構造部材（設備、看板、照明機器など）には注意が必要だ。

『Challenge JAL』などJALグループのさまざまな取り組みは、右記JAL Webサイトでご覧いただけます。 → www.jal.com/ja/